

「白楽天」を歩く

廣田 幸稔

能「白楽天」では、唐の詩人・白楽天が大陸から船で日本を目指し、筑紫国松浦渚で漁翁に姿を変えた住吉明神と出会います。舞台前場の白楽天と漁翁の出会いも、後場の白楽天と住吉明神とのやりとりも、物語は全て松浦渚の海上です。

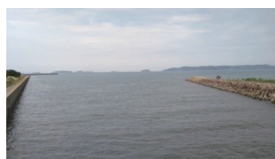
松浦の地名を探すと、九州西北部に松浦半島があることがわかります。長崎県佐世保市から佐賀県伊万里市に至る北松浦半島と、北部に突き出した佐賀県唐津市あたりの北松浦半島を指します。南に佐世保湾（長崎県佐世保市）、西北から伊万里湾（長崎県松浦市・佐賀県伊万里市）、松浦湾（長崎県松浦市）、唐津湾（佐賀県唐津市）、北には玄界灘と豊かな漁場に囲まれ、平戸島、杓岐・対馬を始め半島周辺には大小の島々が点在しています。東松浦半島にはJR筑肥線、北松浦半島は松浦鉄道が地域の重要な交通機関です。

まずは、松浦鉄道「松浦駅（長崎県松浦市）」へ。駅前には「アジフライの聖地 松浦」のモニュメント。松浦市はアジの水揚げ日本一だそうで、隣の調川（つきのかわ）駅には「日本一のアジ・サバ水揚げ基地」の表示があり、松浦魚市場の大きな建物からも漁港の活気が伺えます。この辺りは古くから陸路より海路が発達し、平安時代後期には平家の水軍として、鎌倉時代は蒙古襲来の最前線で活躍した松浦党の本拠地としても歴史に名を刻む地です。松浦湾に浮かぶ鷹島の海底には、今も元寇の役の際に暴風で沈んだとされる四千隻もの

船の海底遺跡が残されています。また、波瀬駅近くには海に突き出た小島前方後円墳などの遺跡があり、すでに六世紀後半には貿易や海上交通の要として大陸との行き来も盛んな地域だったことが伺えます。

さて、地図では唐津湾の東に松浦渚（佐賀県唐津市）があります。松浦湾（長崎県松浦市）とは違い、こちらは遠浅の砂浜が続く穏やかな海岸線です。大きな船は渚には入れず、沖で小舟に乗り換えるしかない。謡にある「松浦渚」とはここだった！と実感しました。お恥ずかしいですが、現地に行って初めて「湾」と「渚」の違いを肌で感じた次第です。

松浦渚は唐津湾にそそぐ松浦川の東側にあり、三保の松原（静岡県静岡市）、気比の松原（福井県敦賀市）と共に日本三大松原に数えられる「虹の松原」の景勝地。虹の松原南にある鏡山は山上憶良が万葉集に「遠つ人松浦佐用姫夫恋（まつらさよ



↑松浦湾。船が横付けできる港



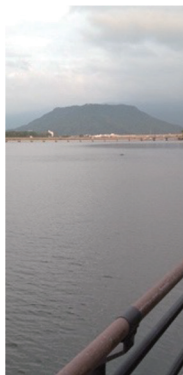
↑松浦鉄道「松浦駅」
一駅東はアジ・サバ水揚げ日本一の「調川（つきのかわ）駅」、西は「松浦発電所前駅」。



↑松浦川、唐津城、松浦湾を望む



↑唐津城は、豊臣秀吉の家臣・寺沢広高によって慶長7(1602)年に築城。別名「舞鶴城」



↑松浦川から鏡山を望む



↑唐津市街地図



↑遠浅の海岸線が続く松浦湾



↑虹の松原
全長4.5キロ、幅500mに約100万本の松林が続く。
唐津城初代城主が防風林として植林したのが始まりといわれる。

ひめつまごい」に領巾振りしより負える山の名」としても記された場所です。標高は二八四m、頂上は平らで松浦川から見上げるときれいな台形です。展望台下の張り出しスペースからは、唐津市街は勿論、松浦川、唐津城、虹の松原、松浦湾、玄界灘、晴れた日には遠く壱岐の島影までが見えます。この鏡山、地元の方に聞くと、実は富士山より高い日本一の山だとか。というのも鏡山は「かがんでいるから、立ったら高い」でも立った姿は誰も見たことがないとのオチがつかしました。

唐津市は「唐の津」と呼ばれた国際都市で、松浦から壱岐・対馬に渡れば韓国までは五〇キロ。これは大陸と日本を結ぶ最短距離のコースです。元寇や水軍、水揚げ日本一の漁港や火力・原子力発電所がある現実の湾の姿と、万葉集や漢詩や和歌のやりとり等、伝説や能に代表される物語の世界の湾が隣合わせに見る旅行となりました。

余談ですが、祇園祭の山鉾に「白楽天」があり、今年は早速、白楽天山にお参りさせていただきました。